

機関番号：23803
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2008 年度～2010 年度
 課題番号：20592555
 研究課題名（和文） 緩和ケア病棟入院中のがん患者の家族を対象とするサポートグループに関する研究
 研究課題名（英文） Researching support groups targeting families of hospitalized palliative care cancer patients
 研究代表者 奥原 秀盛（OKUHARA HIDEMORI）
 静岡県立大学・看護学部・准教授
 研究者番号：60288066

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、緩和ケア病棟で開催している「家族同士の語らいの会」と称するサポートグループに参加した家族が、どのような経験をしているかを明らかにすることである。緩和ケア病棟に入院した患者に付き添い、日々衰えていく患者の心身の変化をつぶさに感じとりながら孤独と不安の中にある家族にとって、本会は分かり合える他の家族と出会いの場、自己を解放し振り返る場になっており、今後の家族支援の重要な方策となり得ると考えられた。

研究成果の概要（英文）：The objectives of the current research are to shed light on the experiences of families that have joined the palliative care ward support group “Families’ discussion meeting (*kazoku-doushi no katarai no kai*)”. Focusing on issues related to families caring for patients that have been hospitalized in palliative care wards, and feelings of isolation and anxiety that accompanies the patient’s deteriorating condition, the support group provides a meeting place for families to meet, understand, release and reflect on their experiences. Important implications for future family support policies are discussed.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：臨床看護学

科研費の分科・細目：がん看護学

キーワード：緩和ケア、家族ケア、サポートグループ、質的研究

1. 研究開始当初の背景

がん患者は、長期にわたる療養生活において、身体的、心理的、社会的そして **Spiritual** な問題を抱えているが、それはまた家族も同

様である。緩和ケアにおいては、基本理念のひとつに「患者と家族を1つの単位としてケアすること」¹⁾を謳っており、患者に寄り添う家族を、患者と共に援助していく方法を模

索しつつある。

欧米においては、1970年代後半以降、がん患者や家族の支援方法の一つとして、サポートグループ（以下SGと略す）に注目が集まっている。このSGは、同じような苦悩を抱えている当事者同士が相互に支え合い励まし合うものであり、グループ参加による心理的効果が明らかにされてきた^{2)~5)}。本邦においても、徐々にその取り組みが行われつつあり、同様の結果が報告されつつあるが^{6)~8)}、多くは患者本人を対象とした外来や地域で運営されている。家族のみを対象としたSGとしては遺族を対象としたSGがみられる⁹⁾が、緩和ケア病棟に入院中の患者の家族を対象とするプログラムは行われていない。

そこでわれわれは、緩和ケア病棟に入院している患者の家族への支援方法として、平成15年12月からこのSGを「家族同士の語らいの会」と称して導入し、そこでの語りの様相について探求してきた¹⁰⁾。しかし、個々の参加者がグループの中でどの様な経験をし、そしてその経験は当事者にとってどの様な意味があるかについては十分探究されていない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、SGに参加する家族がグループの中でどの様な経験をしているのか、そして同じような境遇にある者同士が語り合うことが当事者にとっていかなる意味をもっているのかを探求することである。

3. 研究の方法

本研究は、緩和ケア病棟に入院中のがん患者の家族を対象とするSGを開催し、そこにおける参加者個々の経験およびその経験の当事者にとっての意味を明らかにしようとするものである。同会は、緩和ケア病棟のラウンジにて週1回、2名の研究者で60分間定期的に行い、グループの形態は、「非構造化」、「開放型」、「支持的感情表出型」とした。「非構造化」とは、話し合う内容は特定せずその時参加者が話したいことを話しあう方法で、「開放型」とは、いつでも誰でも参加できる方法である。また、「支持的感情表出型」とは、主として感情に焦点をあて感情表出を促進する方法である。

重篤な状態にあるがん患者の傍らに寄り添いながら日々を過ごしている家族は、われわれ医療従事者が考え及ばぬような経験をしている可能性がある。この可能性を探究するためには、当事者一人ひとりの経験を深く掘り下げることが必要となる。そのため、当事者の視点から人間の経験について理解を深めることを重視する質的帰納的研究方法で行った。

(1) 研究対象：「家族同士の語らいの会」に

2回以上参加した者のうち、患者と死別後6カ月以上が経過し心身が安定している者で、文書による研究参加・協力の同意の得られた者5名とした。

(2) データ収集方法：半構成的面接法

「家族同士の語らいの会」での経験、参加して感じたこと等について60分程度の半構成的面接を行い、対象者の承諾を得てICレコーダーで録音した。

なお、研究協力依頼及び面接については、以下の手順で行った。①緩和ケア病棟の師長が、電話で家族の心身の状態を確認すると共に研究の概要について説明し研究協力依頼を行った。②研究協力の内諾の得られた者の連絡先を、その方の承諾を得て研究者に伝えた。③研究者が直接電話連絡を行い、対象者の都合を最優先して面接の日時・場所を決定した。④面接時に、研究者から文書で研究の趣旨・目的・方法等について説明し、文書による同意を得た。その際、研究協力は全くの自由意志によること、協力しないことにより不利益を被ることは一切ないこと、協力を承諾した後でも辞退することが可能であり、辞退した場合でも不利益を被ることはないこと等を説明し、協力することに負担感や不安がある場合には率直に断れるような雰囲気の中で行った。また面接時に心身の不調を訴えた場合には、面接を中止あるいは中断する予定であったが、不調を訴えた者はいなかった。

(3) データ解釈・分析方法：データの解釈・分析は、以下の手順で行った。①録音した面接内容を逐語録に起こし、対象者ごとに「家族同士の語らいの会」での経験及びその人なりの意味づけが把握できるまで繰り返し熟読した。②「家族同士の語らいの会」での経験及びその人なりの意味づけを表していると思われる重要な文章を抜き出した。③②で抜き出した文章を、全体の文脈を大切にしながら丁寧に解釈しテーマを見い出した。④対象者から得られた個々の逐語録について、上記のプロセスを繰り返し、いくつかのテーマ群に整理した。

4. 研究成果

(1) 「家族同士の語らいの会」参加者の概要
「家族同士の語らいの会」の開催数及び延べ参加者数は、平成20年度42回89名、21年度41回69名、22年度41回106名であった。その内2回以上参加した者は、20年度12名、21年度11名、22年度17名で、最大10回参加した者もいた。患者との続柄は、妻が最も多く、娘、姉妹、母、夫の順であった。

(2) SGに参加した家族のグループにおける経験

データ解釈の結果、SGでの経験として7つのテーマ、【心身の解放】【自己の振り返り】

【患者と別れる現実の実感】【別れの準備】
【分かり合える関係】【他家族との貴重な出会い】
【語ることや参加への抵抗感】に整理された。以下、各テーマについて、対象者のデータを示しながら記述する。

【心身の解放】

「会に行ったら切り替えられないですか。解放されたというか……。病室にいるとやっぱり重苦しいものがありますよ」「1人で悩んでいるよりか、なんかちょっと声をかけられるっていうのはすごくね、気が休まるというか……」と語られたように、個室で日々衰弱していく患者と向き合う生活の中で、会に参加することにより心身ともに解放されていた。

【自己の振り返り】

「(患者が)『濃密な人生送った』って、自分に言い聞かせてやれる……。ほんとに家族が集まるっていうのは、良いことだと思って。やっぱり聴いて頂くっていうことがいいんじゃないですか」というように、会で語ることを通して、できることはやったと自分に言い聞かせながら、これまでの患者との生活、自己の関わりを振り返っていた。

【患者と別れる現実の実感】

「1人減り、2人って。昨日会ったのに今日は会えないとかね……。でもね、こういう会があって良かったと思いますよ。他の家族の人たちとお話できてね。でも誰にも必ず来る、これだけは必ず来るもんだなってことを思いましたね」と語られたように、定期的に参加することで、患者の生存を再認識すると同時に、これまでの参加者が来なくなることで患者と別れなければならない現実を実感していた。

【別れの準備】

「(他の家族の話聞いて)うちもこうなるのかなと予想がつかますよね。少しイメージができるというか……。そうなるんだったら、じゃ、ああしておこなくちやいけないとか。後になって後悔しないようにね。だからその面では、良かったと思います」と語られたように、会において、徐々に衰弱していく患者の姿を語ったり、他の家族の同様の語りを聞いたりして、後悔のない別れをするための準備を行っていた。

【分かり合える関係】

「他の家族の方の気持ちってのが分かりますよね。私と一緒になんだって。辛さって言うかね。で、こう慰められるようなところもありますよね……」というように、当事者同士、語り合うことで、辛さを共有し慰められる経験をしていた。

【他家族との貴重な出会い】

「(会の)後で、廊下でお会いしたりすると、1回お会いすると心安くなりますよね。そういうね、隣近所じゃないけど、お話が少しで

もできて良かったですね」「会に出てね、やっぱり顔見知りになることですね。他に誰もいないじゃないですか。看護師さん達も良くして下さいんですけど、無駄話はできないですよ。皆、今はそれこそマンション暮らしみたいなものですよ」と語られたように、マンション暮らしのような個室生活から、気軽に話し合える隣近所のような付き合いになる他家族との出会いの場になっていた。

【語ることや参加への抵抗感】

「内容が内容だけに、皆、もうね(参加することを)嫌がっているっていうのはあったのかなって思うし」「出づらい。良いことじゃないもんでね。それやっぱ、他人にしゃべるっていうのは、やっぱり言いづらい面もあるし……」と語られたように、他者との関わりを求める一方で、重篤な患者の状態や死について人前に語ることに戸惑いや抵抗を感じていた。

以上のように、SGは、緩和ケア病棟に入院した患者に付き添い、日々衰弱していく患者の変化をつぶさに感じ取りながら患者の死と対峙している家族にとって、心身ともに自己を解放する場となっていた。その一方で、重篤な患者の状態や死について語ることに抵抗を感じ、参加を躊躇する家族もいることから、それぞれの家族の心身の状況、価値観等を考慮したうえでの、自己を解放出来る場の確保の必要性が示唆された。

また、当事者同士、分かり合い慰め合える関係の中で語るとは、これまでの患者との生活・関わりを振り返る機会となり、自己を肯定し後悔のない死別に向けての心理的準備を支える機能を有していると考えられる。

さらに、SGでの他家族との出会いは、その会だけに留まらず、その後の隣近所のような付き合いへと発展しており、死別後を含めた継続的な相互のサポートの可能性が示唆され、今後の家族支援の重要な方策となると考えられる。

引用・参考文献

- 1) 長谷川浩. ホスピスケアに関する参考資料: 現代のエスプリ 274, ホスピスケアの展望, 至文堂, 179, 1990.
- 2) Fawzy FI, Fawzy NW, Hyun CS, et al. Malignant melanoma. Effects of an early structured psychiatric intervention, coping, and affective state on recurrence and survival 6 years later. Archives of general psychiatry. 50(9), 681-689, 1993.
- 3) Spiegel D, Bloom JR, Kraemer C, et al. Effect of psychosocial treatment on survival of patients with metastatic breast cancer. Lancet 14, 888-891, 1989.

- 4) Edmonds, C. V., Lockwood, G. A. & Cunningham, A. J., Psychological responses to long term group therapy: A randomized trial with metastatic breast cancer patients. *Psycho-Oncology*, 8, 74-91, 1999.
- 5) Meyer, T. & Mark, M. M., Effects of psychosocial intervention with adult cancer patients: A meta-analysis of randomized experiments. *Health psychology*, 14(2), 101-108, 1995.
- 6) Hosaka, T., A pilot study of a structured psychiatric intervention for Japanese women with breast cancer. *Psycho-Oncology*, 5, 59-64, 1996.
- 7) Fukui, S., kamiya, M., Koike, et al., Applicability of a western-developed psychosocial group intervention for Japanese patients with primary breast cancer, *Psycho-Oncology*, 9, 169-177, 2000.
- 8) 吉田みつ子, 遠藤公久, 守田美奈子, 朝倉隆司, 奥原秀盛, 福井里美. がん患者のための地域開放型サポートグループ・プログラムの効果検討, *心身医学*, 44(2), 133-140, 2004.
- 9) 広瀬寛子, 田上美千佳, 柏 祐子, 他. 高齢者の遺族にとってのサポートグループの意味ーがんで配偶者を亡くした2事例の分析を通してー, *ターミナルケア*, 14(5), 419-426, 2004.
- 10) 小坂美智代, 奥原秀盛, 西村ユミ, 他. 緩和ケア病棟における家族を対象としたサポート・グループでの話りの様相, *日本がん看護学会誌*, 21(1), 14-21, 2007.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計0件)

[学会発表] (計2件)

- 1) 奥原秀盛、白尾久美子、他2名、緩和ケア病棟入院中の患者の家族が「語らいの会」に参加することの意味、第25回日本がん看護学会学術集会、平成23年2月13日、神戸市。
- 2) 池田和恵、奥原秀盛、白尾久美子、他3名、がん患者の家族を対象とするサポートグループにおける参加者の体験、第22回日本がん看護学会学術集会、平成20年2月9日、名古屋市。

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称：
 発明者：
 権利者：
 種類：
 番号：
 出願年月日：
 国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：
 発明者：
 権利者：
 種類：
 番号：
 取得年月日：
 国内外の別：

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

奥原 秀盛 (OKUHAR HIDEMORI)
 静岡県立大学看護学部・准教授
 研究者番号：60288066

(2) 研究分担者

白尾久美子 (SHIRAO KUMIKO)
 静岡県立大学看護学部・准教授
 研究者番号：80269703

池田和恵 (IKEDA KAZUE)
 元静岡県立大学看護学部・助教
 (H20,21年度のみ、その後退職)

(3) 連携研究者

()

研究者番号：